

栄光

説教……………	1
特集・旅の思い出 エトセトラ……………	2
追悼・ 大木淑子姉……………	4
コロナ下の教会 ……………	5
伝道師の書き込み……………	7
牧師の書斎から……………	7
長老のファイル……………	8

説教

『弱いときにこそ強い』

イザヤ書42章1節～4節

コリントの信徒への手紙二12章7節～10節

岸 俊彦

「誇る者は主を誇れ」(10・17、1コリント1・31)と語るパウロの使徒としての根拠は、主以外にはありません。それも十字架の主イエス・キリストです。私たちの信仰の根拠も同じです。

この主とパウロを結びつけたのは、彼の血統でも、賜物でも、神秘体験でもありません。パウロを生涯苦しめた「肉体の棘」でした。具体的な病名は分かりませんが、「サタンの使い」(12・7)、「さげすまれたり、忌み嫌われたりする」ような病と(ガラテヤ4・14)自ら言うほどでした。「離れ去らせてくださるるように、わたしは三度主に願いました」(2コリント12・8)とパウロが必死に祈り求めたのですから、使徒としての働きを邪魔する厄介ものと思われた

うやく主の御声を聞くことができたのです。「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」(フィリピ4・13)。肉体の棘が取り去られなくとも、主の御声がパウロを新しい人生へと導きます。

パウロは肉体の棘が突き刺さったままであることで、自分は脆く儂い土の器であることを知りました。主の御前で自らの弱さを認め、無力さを知りました。長年の伝道者としての経験と祈りの中で、肉体の棘が突き刺さった罪人の自分が、主の使命を果たすことができ

たのは、主が助けてくださったからです。弱さ、無力さ、罪深さを嘆き、訴える、そのままの自分の力が働いてくださいました。自分の願いが叶えられることが恵みなのではありません。「わたしの恵み」は、自分でも嫌い、受け容れがたい、また、人からも忌み嫌われ、さげすまれる、人生のマイナスとしか考えられないところに働きます。自分の願いや思い、自慢や誇り、高慢さを打ち砕き、主の御前にへりくだり、祈り、主と私をつないだのが、サタンの使

いとしか思えなかった肉体の棘です。

「嘆き、悲しみ、泣くことによって、主の前にへりくだることができる。もし喜び、笑っている自分であるならば、表面だけ取り繕っている自分がいるであろう。主の前でへりくだればこそ、神の恵みを受け取ることができる。

へりくだっている自分は、弱々しい自分かもしれない。しかし、その弱々しい自分であればこそ、神からの慰めを受けることができる。強ければ、慰めは不要となる。自分が徹底して弱ければ弱いほど、主の恵みは上から流れて自分に力強く注がれる。これほど素晴らしいことがあるだろうか」(賀来周一)。

パウロが長年苦しんだ、伝道の妨げ、使徒の欠陥とされた肉体の棘が、かえって主に立ち帰り、祈り、御心を求め、御前にへりくだって生きることを教えました。サタンの使いによって痛めつけられながら、ついに主に結ばれて、大いに喜んで自分の弱さを誇ろう、これこそ使徒の根拠、人生の根本と悟られました。

旅の思い出、エトセトラ

「ステイホーム」の期間中、

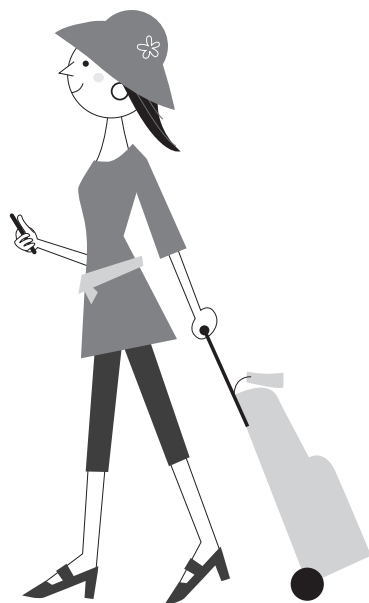
自宅で片付けをされていて、昔の懐かしい写真が出て来た
なんていうこともあるのではないのでしょうか。

聖書は「パウロの伝道旅行」をはじめ

私たちに地図を眺める楽しさを与えてくれます。

聖書の世界を旅してきたという人も。

皆さんにはどんな旅の思い出がありますか？



不思議な出会い

岡本四郎

2018年11月に長崎と五島列島を訪ねました。

ちょうど、長崎と熊本両県に点在する12の潜伏キリシタン関連施設がユネスコの世界遺産に登録されたばかりの時期でしたが、かねてよりぜひ一度訪ねてみたいと思っていた場所でもありました。

20年以上の長きにわたりキリスト教弾圧時代を生きた潜伏キリシタン達の生活を偲ばせる現地の様子は、正に「百聞は一見にしかず」だと思いました。また、小さな村に残る素朴な教会群を訪ねると、キリスト教解禁を迎え自由な信教を取り戻した信徒達の心からの喜びと信仰の深さがひしひしと感じられ、強い感銘を受けました。

しかし、この旅が特に印象深かったのは上五島観光で一緒にすごしたご夫婦との不思議な出会いです。上五島のツアー参加者は少人数でしたが、ツアー終了後に一組の

ご夫婦が私達と同じ船で福江島に渡り同じホテルに宿泊されることが分かり、ご一緒しました。

私達は翌朝ホテルを立ち長崎に向かう予定だったのでホテル到着後にお別れしましたが、なんと翌日の夕方長崎のホテルで遭遇！今回の旅は上五島と下五島での観光で現地の観光協会のツアーを利用する以外、飛行機やホテル、レンタカー等は自分で手配したので、福江島と長崎に数あるホテルの中から2ヶ所とも同じホテルを選択する確率を考えると単なる偶然とは思えず、その後少しお話ししました。そして奥様が日本基督教団の教会員であることも分かり、不思議な力を感じました。

その後、岸先生に旅行の話をしたところ、その奥様の父君・林田秀彦氏が岸先生の東神大時代の恩師であったことがわかり、驚きました！しかし、それだけではなくその後、久保哲哉先生の聖学院時代の校長でもあったことが判明しました。

これが岸先生が時折お話されている「神様のネットワーク」なのかと実感した旅の思い出です。

奇跡の休日

畠山直子

出張、という結果に責任を持つ
ブレッシヤーを抱えた旅は、楽しい
思い出もありますが、やはり私
的な旅の楽しみの大きさは計り知
れません。計画段階でのわくわく、
旅行中のいくつもの発見、帰って
きてからもずっと続く思い出など。

一番心に残る旅は2007年11
月初旬に夫と行った中欧旅行で
す。今となつては奇跡の6日間で
した。肺がんの後遺症と、いつま
でも続く抗がん剤の副作用による
心臓疾患を抱えていた夫がその時
はまだなんとか普通に歩いて、食
べることが出来ました。

チェコ、ハンガリー、オースト
リアを巡る旅ではどこでも楽しい
発見がありました。特筆すべき
は、どうしても行きたかったウィ
ーンのオペラ座で、リヒャルト・
シュトラウスの「アラベラ」を鑑
賞し、美術史美術館で脚が棒にな
るまで歩き回り、全ての展示作品

を見たことです。国内でも何度も
オペラを観、また美術館にも行き
ましたが、建物構造、観客の動き
などが日本のものとは違うように
思われ、感動しました。またリン
クを走るトラムでは、乗り合わせ
た私たちと同年配の紳士が、自ら
車窓の景色を丁寧に英語でガイ
ドしてくださり、運転手さんが親切
で、「さすが観光立国」と感激し
ました。街中どこからもワルツが
聞こえてきそうなウィーンの街が
大好きになり、きつとまた来よう
と約束したのです。

しかしそのわずか半年後、夫は
病状が悪化し、9年に及び入退院
を繰り返し、とうとう召されまし
た。それが2人で行った最後の海
外旅行となり、約束は実現しなか
ったのです。それでも、何度も懐
かしく語り合った思い出の6日間
は、主からいただいた最高の休日
だったと感謝しています。

あれ以来世界中でテロ、暴動、
そしてコロナ禍と、平和とは程遠
い日々が続いています。心置きな
く多様な人々と行き来し、交流で
きる日々がどれほど素晴らしいこ
とかを自粛生活で再確認しました。

一枚の思い出の写真
かけがえのない友を偲んで

千葉一恵

新型コロナウイルス感染拡大で
保育園は休園。私は感染の不安の
中で自宅待機で、気になっていた
本棚の片付けを始めたのです。す
ると本の間から、色あせた一枚の
写真を発見！それは今から50年
前の中学時代からの親友との想い
出の写真でした。二人共満面の笑
顔、何か気持ちがゆれる時、この
写真を見ると、ほんと心癒され落
ち着くので手帳に入れて持ち歩い
ていたのですが、いつの日か見失
っていたのです。このコロナ禍の
中で一つだけ恵みを得たと言え
るでしょう。

この友とはよく旅をしました。
何をしても何を話しても気の合う
友との旅は楽しいものでした。北
海道、稚内から船に乗り利尻・礼
文島めぐり。島を囲む紺碧の海と
高く広がる青い空、一面の黄色の
ニッコウキスゲだと思ふ花がゆれ

ている光景が浮かんできます。島
名物の雲丹。私は苦手なのですが、
友は大好物で漁師さんからの捕れ
たてを、それは美味しそうに食べ
ている姿が潮風の香りをのせて思
い出されます。後に住むこととな
る金沢、北陸もバスで回り、今は
世界遺産となった白川郷、合掌造
りの家が並ぶ景色の中にゆったり
と抱かれるように過ごした夏の日
が蘇ってきます。彼女との旅は穏
やかで、いつも笑顔で過ごせ、互
いに歳を重ねても旅を楽しみは
ずでした。

でも、かけがえのないその友は
33年前、突然天へと一人で旅立
ってしまったのです。今、思うと、
まるでその別れが来るのが分かっ
ていたように、会うと旅の計画を
立てては出かけていたように思
います。若い日の、この友との出
会いと温かな旅での交わりの20年
は私が生きてゆくのに必要な時
として神様がくださったのだと思
わされ、見つけた一枚の写真を手
に、友を偲びつつ感謝するのです。
「私の恵みは、あなたに十分であ
る。力は弱さの中でこそ十分に発
揮されるのだ」(Ⅱコリント12・9)。

私の礼拝出席は

照内眞知子

45年前、経堂に引越してきて、地図を見ながら自転車、徒歩で、探検しました。家の周り、商店街、もう少し足を延ばして、と動き回るのは楽しい時間でした。ちょっとした出先、旅先でも、位置関係が把握できたりするとうれしいものです。

どうしてそうだったのか、記憶にないのですが、転会する教会を決めずに引越しましたので、教会の情報は、地元の夫からのいくつかでした。まず場所を確認して、そして、日曜日に礼拝に。そうして経堂北教会にたどり着きました。

経堂北教会は所属としては2つ目の教会です。育った教会では生まれる前からずっと、守られ、育まれたと感謝しています。いろいろなことはありましたが、自分なりのやりくりで教会生活を守ることができました。友人関係も仕事

も、日曜日を取り分けて組むことができました。守られ甘えていたのです。

結婚してからも、希望、意思を尊重してもらい、日曜日は教会に行く、という生活をずっと守ることができました。以下はそのおまけ、のような話。

旅行は祝日や夏休みの週日を利便して計画していました。旅先になんか教会があるか、調べる必要のない計画でした。墓参も日曜日を避けて組んでいました。墓所のすぐ近くに「福島教会」があることを知ったのは震災で崩れ、取り壊されてしまった後でした。何度かすぐそばを通っていたのに、礼拝に出席することはもちろん、会堂を見ることがなかったのです。教会の若い家族は避難して福島を離れ、礼拝を守る人が少なくなっていると感じました。日曜日に礼拝出席を含んだ墓参計画はどうかと思い、つぶやいた時の家人の反応を見て愕然。どれだけ尊重してもらい、縛っていたのかと改めて思ったことでした。

追悼

祈り

故・大木淑子姉

大木淑子さんは6月2日逝去しました。享年93歳でした。5月初めに3女の宮崎真理さんから「母は元気です」と聞いていましたから、ご高齢とは言え急なことでした。

淑子さんは、商社マンの公治さん（1995年逝去）と約10年ロンドンに滞在しています。どのような経緯かは分かりませんが、1987年に英国国教会ロンドン聖アンデレ教会で受洗しています。ロンドンJCFと当教会の間わりから、帰国後1991年イースターから御夫妻でほぼ毎日曜日礼拝に出席し、公治さんは1992年イースターに受洗しました。同時に淑子さんも英国国教会から当教会に転会しました。

神戸女学院の出身で、「戦争中は学徒勤労動員で落下傘や白衣縫

製にかり出され、何もかも不自由でしたが、それなりに充実した青春でした」と回顧しています。「戦時中でも毎朝の礼拝に始まった、十年余りの学生生活が、今日の教会の生活につながっていることを、心から感謝しております」と『栄光』に記しています。

淑子さんは百合の花が好きでした。教会では白百合は「復活の象徴」とされてきました。主イエス・キリストの死と復活の出来事による死に対する勝利を、私たちは信じるのが許されています。この主の恵みによって、天も地も結ばれています。

晩年、淑子さんは毎晩「父母と主人の写真の前で一日の報告をして」、愛する家族に主の恵みが豊かにあるようにと祈りました。この主の恵みは、淑子さん一人のものではありません。愛する家族と分かち合うことのできる恵みです。「命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう」（詩23）。この祈りに主は応えて、淑子さんを御国へと召してくださいました。（岸^俊）

「コロナ下の教会」



コロナと私

榎原 正

コロナウィルスが蔓延し始めて私の生活で変わったことは、妻に歩調を合わせて散歩をするようになったことかもしれない。住処の周りには開発が進んだとはいえず、まだ畑があり里山もある。鶴見川をはじめ、いくつもの小川が流れ、若葉が燃えたつ丘も見渡せる。川沿いの道は歩く人も少なく、接触することも少ない。のんびり歩きながら、道端の無人の野菜売り場で品定めして小袋に入った野菜を買うのもストレス解消には良いようだ。

この町に30年も住んでいるが、愛犬が亡くなってからここ数年、必要な時以外ほとんど歩くことがなかった。新型コロナウィルスが世界中の人々を動揺させ、生活するうえでも様々な制約を受けるようになった。日本でも「三密」にならぬよう心掛け、不要な外出は控え、自宅待機」と言われてもそ

れでは健康を害してしまう。

そこで散歩を必要なくと決め、マスクを持参で歩くことにした。諸外国では外出禁止命令が出された国もあるが、日本は要請にとどめられたことはありがたかった。

経堂北教会において東京都の要請を踏まえたうえで、会堂礼拝が守られていたことは主の恵みと感謝。私たちは車で県境を越えて会堂で礼拝にあずかっていたが、多くの教会員の方はオンラインで自宅礼拝を献げているようだ。

私たちは『使徒信条』を告白し、主の祈りを献げている。新型コロナウィルスに注意を怠らず、恐れることなく主を見上げて生きていきたいと思う。



コロナ禍でのCS

石室裕一

CSも学校も休校中の4、5月、家にいる子どもたちが何を考え、どのような制約の中で日々生活しているのか、CS教師たちは思いをめぐらせ祈り合いました。

休校中、三大祝祭日の2つ、イースター、ペンテコステが重なりました。イースターには教師手作りのカードを郵送しました。ペンテコステには教師全員出演の動画を作成し、子どもたちに送りしました。一人ひとりの特徴が表れた良い証の動画になりました。

他には「CSちゃんねる」という、教会限定配信のYouTubeチャンネルを作り、行事写真を動画アルバムにしたり、教師からのメッセージを伝えました。5月からネット配信でCS礼拝を始めました。

このスマホ万能時代、これまで子どもたちの写真や動画を保護者の方に送信してきました。しかし、教師の姿をあえて送ることはありませんでした。ですが、我々が祈っていることを伝えたい思い



もあり、休校中は教師の姿にも焦点を当てて配信しました。保護者の方からは、「先生方がどのような眼差しで子どもと接しているかがよく伝わりました」という感想をいただきました。

礼拝配信を家族で興味深くご覧になっていくという感想も励みになりました。保護者の方からの声をいただく度に、子どもたちの近況を知ることができて感謝でした。待ちに待った6月第1週の新学期には、我々の予想を上回る人数が主に導かれて元気に礼拝に集いました。

子どもたちの生活、心持ちは大きく変わった春でした。コンディションを整え直す方法や期間は、子ども一人ひとり違います。我々教師はそっと寄り添い続けます。

広島家庭集会

牧内美和

今回のコロナ禍で、世界中の人々が仕事も遊びも自粛を余儀なくされたこの春。住み慣れた東京を離れ広島へ転居した私も例外ではありません。予定では4月1日から、仕事を始めるはずでした。しかし到着した日の朝、突然コロナを理由に就職を取り消され、人生の予定と計画は一変しました。まさに青天の霹靂。ハローワークに通う日々。コロナ禍の中で面接してくれる企業がある訳もなく、悶々と日々を過ごしました。

そんな中、ライブ配信で礼拝が始まるという嬉しい知らせが！早速伯母と二人、スマホの小さい画面を見ながら家庭集会を始めました。東京から来た私の、自主的自粛の2週間も過ぎ、親戚5人で集会を持つことも出来ました。毎週末には週報を準備し環境を整えました。2人きりで礼拝を守っていた時には大きな声で賛美出来なかった伯母が、高橋麦君、小田瑠恵さん、妹の毬恵伯母の気持ちの良い歌声に誘われて歌い始めたこ

とや、画面に映る教会員の皆さんの後ろ姿に、「ここも教会」と胸が一杯になりました。そして今日12回目の広島家庭集会を迎えることが出来ました。

教会シックやコロナ鬱にならずに済んだのは、1週間が礼拝から始められるライブ配信の恵みによるものです。配信が無かった当初も、週報に基づいて賛美し聖書を読んでいたが、配信が無ければここまでちゃんと続けられなかったのではないかと思います。準備してくださった先生、承認してくださった長老会、ソーシャルディスタンスを守って参加された皆さん、そして何より神様のお守りに心より感謝しています。追伸…その後無事にリハビリ病院に就職が決まりました。感謝です。主にありて

不確かさと確かさの中で歩む

村松真友子

子どもたちの学びの在り方を、学校は迷っています。新型コロナウイルスは、教育の在り方を見直しを急速に迫ってきました。それが問われていたのは今に始まったことではなかったはず。教育のIT化、大学入試改革など、生徒がこれから生きる未来を「想像」する時に、従来型の詰め込み教育では立ち行かず、ゆとり教育では間に合わない、教育界は過渡期にあるのだと、教師たちは自覚していました。しかし、変化は学校が動ける速さよりもはるかに速いスピードでやってきました。戸惑う学校は今、時間割と授業の実施媒体が変わる日々や生徒の状況の不確かさに嘆きつつも、再開に向けて動いています。

生徒はどうなのでしょう。私は今年度、キリスト教学校において中学校1年生の担任になりました。入学式は中止、登校出来た日は未だ4日間という中、気づいたことがあります。5月、キリスト教オリエンテーション行事とし

て、オンラインで牧師先生のお話を聞いたりゴスペル賛美を歌ったりする機会を持ちました。生徒たちは画面越しに真剣な眼差しで話を聞き、自分を振り返り、イエス様と出会い、「不安な時には祈りたい」「イエス様が愛してください」と純粋に学んでいます。キリスト教教育の場には、いつだって変わらない聖書の真理と、10代の柔らかな感性・吸収力がありました。

急激な、極端な変化と、変わらない真理。すべては神さまが「創造」されたもの。いつだって人間は脆いという不確かさを自覚する一方で、神さまを信頼する時に強められ、互いに愛し合うことのできる営みの確かさもまた感じています。誰もが不安を覚える時ではあります。祈り求め続け、期待して歩む、そのようにありたいと思っています。

伝道師の書き込み

6月最初の日曜日は、千歳丘教会の礼拝で説教奉仕をさせていただきました。ご存じのことかもしれませんが、経堂北教会にとつては、もよりにある教会として牧師会や受難週の祈禱会を共にしている教会です。実は説教奉仕の話自体は結構前から受けていました。まだコロナの大騒動も対岸の火事だった1月の終わりごろだったかと思います。しかし蓋を開けてみ

れば、私の説教奉仕の日は奇しくも緊急事態宣言解除予定の週となりました。千歳丘教会ではコロナの感染防止のため3月終わりから自粛をしていたとのことで、この日は久しぶりに通常の礼拝を再開する日であったそうです。後から聞いたところ、出席は普段の半分程度とのことでしたが、落ち着いた日常の礼拝だった、そういう印象でした。私があまりに緊張していたせいなのかもしれませんが。礼拝の中では聖餐式も行われませんでした。経堂北教会では6月は様子

見をしていましたので、図らずも皆さんより一足先に聖餐の食卓に与ることになりました。聖餐の喜びというものを改めて感じるひとときでありました。

「コロナ後の生活」という言葉が聞かれるようになって、それなりに経ちました。インターネットを利用して礼拝を配信する教会もかなり増えたようです。ただ、説教は聞けたとしても、聖餐だけはどうにもなりません。確かに聖餐は時間も場所も超えるものです。何しろ聖餐においては、主イエス

と食卓を囲むのですから。同時にそれは、キリストに結ばれた先達たち、世界の人たちとも一緒に食事をしているとさえ思えます。けれども同時に、隣に同じように聖餐に与る人がいて、はじめて私たちは「一緒に食事をしている」と、肌で感じるものでもあると思います。これはその場所・その時しか得られないものです。

初めての教会で共に食卓を囲める喜びと、経堂北教会での聖餐が待ち遠しくなる、そういう日曜日でありました。(狩野進之佑)

牧師の書斎から



長老会は、このところ礼拝後短時間で終わるようにしています。事前に資料を配付することは、これまでと同じですが、資料の内容が多少詳しくなりました。長老は予めきちんと目を通して出席することが必須です。事前に調整できることはメールでのやりとりとなります。長老の学びが必要ですが、短時間ではできません。なるべく負担のないようにと考えています。

書記や財務の担当長老の報告を伝道師、牧師がまとめて月報を作成しています。かつて『栄光』1頁に掲載されていた長老会報告を、『栄光』とは別に4頁立ての月報としたのは30年以上も前のことです。ワープロと印刷機のおかげでした。そのうち、必要な方はプリントして、それ以外の方はネット配信となるでしょう。いずれにしても教会員の皆さんがよく読んでくださることが大切です。教団の会議はこのところオンラインで行っています。レベルは違

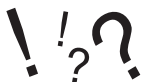
いますがテレビのワイドショーのようなものです。各地にいる出席者の顔が画面に映り、音声がパソコンを通して聞こえてきます。資料はメールで事前配付、準備して会議に臨みます。報告承認だけならこれで十分でしょう。協議となると設備的なことも含めて考える必要があります。世の中から遅れている教団ですが、こちらも慣れていきたいと思っています。

コロナ禍で様々な集会、会議が中止になり、またオンライン会議で旅費も不要となり、この3ヶ月

で教団の経費は500万円減ったそうです。1年間このままなら2千万円支出が減ります。各教会の献金も減っているのですから、負担金軽減のために教団はますます新しい運営と活動に取り組まなければなりません。

教団だけではなく教会も、なくてはならない一つのことは何なのか考え、そのことを基本に据えながら運営と活動の見直しを迫られています。そして主の御名のもとに集まるべきことは何かを明確にしなければと考えます。(岸俊彦)

個人消息



長老のファイル



自粛解除となり、私たちの生活

も自衛しながら日常を取り戻していくことになりました。礼拝にも出席される方が増え、CS の礼拝も再開しました。マスク着用や手の消毒、換気、間隔を置いての着席など感染防止対策を取りながら、ネット配信も併せて礼拝を守られていることに感謝です。それでもこれまでの日常とは違い、気を使いながらの日々、不安や戸惑い

の中でお過ごしでしょう。どうぞ皆様お体大切に、主が共にいてくださり、励ましと癒しがありますようにと祈っています。

学校も保育園も再開しましたが子どもたちの生活も制限の多い日々です。少しでも楽しく新たな生活が過ごせますようにと願っています。勤務している保育園も通常の3分の2ほどの子どもが戻ってきました。食事の場面では、透明の衝立を前に置き静かに、昼寝は出来るだけ間隔を置く、日に何回もの消毒、夏のプール遊びは見

合わせ、制約の多い中で過ごします。私の担当は1歳児なので抱っこは当然、三密は必至です。帰宅後はシャワーに直行。考える自衛を心掛け、自分が感染源になるのをできるだけ避ける努力をしています。同じように、三密な仕事場になる料理の仕事は両立が難しくあきらめました。悲しかったです。

教会の行事も感染防止を考え、バザーは原則中止、ルデヤ会も例会は中止して他の手段を通しての活動を考えてのことです。これ

からも状況を見ながら対処していくことが増えていくでしょう。安心して教会に集い、皆で讃美の声を高らかに上げられる日を待ち望みます。

苦難の時、悲しみの時、不安の時、疲れた時、主に結ばれている恵みを思い出し、すべてを委ねて歩めますように。主よ、どうぞ私たちを励まし強めてください。

(小嶋幸子)

掲示板



○教会では手洗い、消毒、マスク着用をお願いします。お持ちでない方は受付に申し出てください。またなるべく離れておかけください。飲み物はご自分でご用意ください。体調に不安のある方は自宅でお祈りください。

○下記で礼拝のライブ配信を行っています。
<https://www.youtube.com/channel/UCQI8GKLt90oEhgUwfT-heow/videos>
経堂北教会ホームページにリンクを貼っています。

○希望者には礼拝の録音CD、説教原稿を郵送またはメールで送ります。教会にご連絡ください。

編集後記



▽2ヶ月遅れの教会総会が開催されました。長老選挙も無事終わり、ホッとした後の編集委員会となりました。(沢田)

「栄 光」2020 年 7 月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧 師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑
編 集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp